

は斃死要因に関連があるものと思われる。最大の減耗要因としては、仔魚の卵黄が吸収され、外部から餌料を必要とするときに適正なサイズの餌料が少ないことがあげられる。全長が3mm以下の場合、カキ幼生は適正サイズとして良く摂餌されるが昭和59年度におけるカキsp幼生投与試験区ではわずか4.2個のカキ幼生平均摂餌数であった。ハマフエフキやシモフリアイゴの場合、全長3mmサイズであれば平均摂餌数21個の報告があり、その後も消化管が充満する程良く摂餌されている。マダラハタのカキ幼生摂餌量の少なさがどこに原因があるのか究明する必要がある。

表7-1 マダラハタの種苗生産結果

年 度	使用水槽	仔魚収容数	飼育日数	取揚尾数	全 長	歩留り
昭和57年	0.5	65,000	33	60	15.0	0.09
"	6.0	680,000	32	1,000	19.2	0.14
"	6.0	1,650,000	31	170	21.5	0.01

※ 上記以外に25試験区については日令5～19にかけて尾数激減により飼育中止

#### 4. コガネシマアジ

コガネシマアジの仔魚飼育は昭和58～59年の2ケ年間でその種苗生産結果を表8に示す、餌料については日令3からワムシの摂餌が確認され、仔魚1尾当たりのワムシ摂餌量は日令5には20～25個、日令10には30～63個、日令15には100～150個であった。日令15以降はワムシよりもチグリオプスやアルテミアノウブリウスを好んで摂餌した。日令27(仔魚全長17mm)頃からは配合飼料も摂餌するようになり、日令30からは配合飼料単独でも飼育可能であった。昭和58年度の飼育期間中における減耗は第1回目がふ化から開眼、開口時期に、第2回目は日令12～20に、斃死魚は表層水面で横臥状態で浮游、鰓の異常が原因と思われた。第3回目は日令27前後に大小差による共食い現象と大型餌料不足による衰弱死とみられる。

昭和59年度は鰓異常現象による斃死は認められなかったが、日令21に一部分養、あるいは沖出しのため、1日だけ餌止めしたところ、それが原因による大量斃死が生じた。歩留りについては飼育日数の長、短期によって高低差が激しいが1.0～44.6%の範囲で平均すると10.1%であった。

コガネシマアジの歩留り向上の問題点としては日令15～17まではワムシ単独でも充分飼育可能であるが、それ以降はチグリオプス、アルテミア及び天然プランクトンのような500μ程度の餌料が要求され、大量に安定した培養法、採集法が必要である。集魚燈方式による天然プランクトンを網生簀へ網集し、その中に日令15～18(全長6mm前後)の仔魚を放養するものも有効と考えられる。